

特集：山と自然のサイエンスカフェ@信州

Q 外来種カワマスと混生している場所では、イワナが減っているが、上流部にイワナがいるので絶滅するということはないのではないかな？

Q 上高地ではカワマスは流れが穏やかな場所に生息しているが、原産地の北米ではやはり同じような緩流域に生息しているのかな？

Q 地球温暖化の影響が色々な場所で顕在化するなか、国交省で砂防ダムが造られているが魚道がない場合は、魚がいなくなり、鳥がその魚を食べられなくなるなど、生態系が崩れてしまう。河川の中の

生態系も崩れると思うので、そういうことも研究所で調べてほしい。

Q 千曲川中流域で外来種コクチバスが全個体数の約4割を占めることがわかったそうだが、他の河川などではどうか？

Q 天竜川でブルーギルが増えているが、外来生物が増加した要因は研究されているのかな？

Q 南信でウチダザリガニが定着しているそうだが、繁殖が強いものなのか？あの辺りだけにいるのかな？ (北野 聡)

第6回 里山と人との関わり～過去・現在・未来～ 11月12日

長野県は“里山”といわれる地域が県土の多くを占めています。田畑や集落、その背後には森林が控え、そこには人の暮らしと自然が密接に関わる空間が存在しています。信州の里山の風景として、美しい棚田が広がる風景を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。しかし、現実には棚田は耕作放棄が進み、森林も手入れが行き届かず、獣害に悩まされている地域も多いのではないのでしょうか。今回の山と自然のサイエンスカフェでは、このような問題を抱える里山地域に対して私たちは今後どう関わっていけばいいのか。参加者のみなさんと一緒に考えてみました。



美しい里山の風景

まず、戦前の信州の里山の暮らしに関する調査結果をご紹介します。当時の里山は農林業を主体とした生活の場であるとともに、資源・エネルギーの供給減でもありました。日々の食べものはもちろん、薪や炭などの燃料、田んぼの肥料、家畜の餌など、多くの資源を地域内の里山から調達していました。



耕作放棄が進む棚田

ところが、1960年代以降、経済の高度成長とともに人口流出と高齢化が進み、資源も多くを地域外に依存するようになりました。その結果、農地や森林の荒廃が進み、そこに暮らしていた生きものも変化しました。

このような里山地域を今後どうしていけばいいの